

## 研究論文

# 介護現場のニーズにおけるの実習指導の検討と課題

服部 優子・中川 千代

### 1. はじめに

2021（令和3）年度から介護福祉士養成校（短期大学・専門学校などの2年課程）における新カリキュラムが導入、施行されるに伴って本学も科目の分類や内容について協議、調整を行っている。また、2019（平成31）年度から本学介護福祉コース入学者中、非漢字圏の留学生の占める割合が50%を超えており、生活文化や日本語の学習と併用しながら、より理解しやすい伝達方法や介護現場での実践に役立つ指導方法について検討していく必要がある。そこで令和2年度の本学実習施設の指導者を対象にアンケート調査を実施し、介護現場が期待する介護福祉士養成教育についての意見や思いを集約し、本学の学生への実習指導において、よりシンプルかつ実践的な指導を行えるよう課題を検討したい。

### 2. 新カリキュラムにおける介護実習指導の内容やポイントの改正の周知

厚生労働省が示す「求められる介護福祉士像」が2018（平成30）年度の介護福祉士養成課程のカリキュラム改正で見直され、それに伴って介護実習指導の内容やポイントが変更された。

変更内容（表1参照）については日本介護福祉士会のホームページ等で公開され、都道府県介護福祉士会では令和2年度から、新カリキュラムに対応したテキストを使用した介護実習指導者講習会を開催し周知を進めている。しかし、それ以前に介護福祉士実習指導者講習を受講、修了した場合、また数年単位で実習生の受け入れがなかった施設等では、介護福祉士養成課程のカリキュラム改正が行われたことや、介護実習に3つの「教育に含むべき事項」が示されたことを知らないといった指導者の存在が予測、懸念される。更に実習指導者講習未修了ではあるが、実際に実習生の指導にあたっている現場指導者も存在している。本学での実習施設巡回指導時や学生から聞かれる情報からも、実習生が登録指導者（厚生労働省に届出済の実習指導者）以外の職員からアドバイス、指導、実習日誌の助言コメントを受ける機会が実習期間中に比較的多くあり、施設全体で実習生の指導にあたっている様子が伺える。

そこで、今回の調査内容として新カリキュラムの「介護実習」に示された3つの「教育に含むべき事項」についての現場指導者の周知状況を調査項目に追加することにより、現場指導者への周知状況の実態把握と本調査によりその再認識を促すことを意識した。実習指導者の実習生に対する思いやニーズを知るとともに、学生の実習効果を高める実習指導

表 1. 新カリキュラムの「介護実習」に示された 3 つの「教育に含むべき事項」

教育に含むべき事項	留 意 点
1、介護過程の実践的展開	介護過程の展開を通して対象者を理解し、本人主体の生活と自立を支援するための介護過程を実践的に学ぶ内容とする。
2、多職種協働の実践	多職種との協働の中で、介護福祉士としての役割を理解するとともに、サービス担当者会議やケースカンファレンス等を通じて、多職種連携やチームケアを体験的に学ぶ内容とする。
3、地域における生活支援の実践	対象者の生活と地域との関わりや、地域での生活を支える施設・機関の役割を理解し、地域における生活支援を実践的に学ぶ内容とする。

のあり方、そのためのカンファレンスの持ち方や実習現場での具体的指導の方向性を共有し、より実践的な連携のとり方や記録物のまとめ方を学ばせる環境づくりを目指したい。更に、登録指導者をはじめ、現場指導者と養成校教員が互いに協力して介護福祉士育成の場を作り上げていくための一助としたい。

### 3. 調査の概要

#### (1) 研究目的

介護現場で働く実習指導にあたる職員が、養成校の学生達に何を求め、どのような指導を行っているかを知ることにより、養成校と介護現場の「介護福祉士を育成するための指導の方向性や認識のずれ」が存在するかを確認する。介護実習指導において、より学生にとって理解しやすい実践に役立つ指導内容についての課題を検討する。また、本研究は現在介護福祉士養成校で指導教材として使用されている実習ノートに着目し、現場が求める介護福祉士としての人材育成に沿ったものであるか、それぞれの妥当性を検証する。

#### (2) 方法

令和2年4月1日～令和3年1月8日を調査期間とし、「介護現場が期待する介護福祉士養成教育について」というテーマで令和2年度の本学実習施設の登録指導者、及び現場で実習指導にあたる職員を対象にアンケート調査を実施した。対象は入所施設とし、今回は試験的に特別養護老人ホームと介護老人保健施設各1カ所に協力を依頼した。

#### (3) 倫理的配慮

アンケート調査票は無記名の上、記入後の用紙は個別に封入し、個人が特定できないよう配慮した。事前に各施設に電話連絡、本調査に関する趣旨説明を行い、調査・研究の目的、意義、方法、倫理的配慮及び個人情報保護、研究結果の公表方法などについて伝達、周知を行った。アンケート用紙の冒頭に本調査に関する趣旨説明を記載し、回答者一人ひとりに周知できるよう配慮した。本調査・研究は、高田短期大学研究倫理規定および高田

短期大学介護福祉研究センター倫理規定に基づくものとする。

#### (4) 質問項目と集計結果

調査依頼をした2施設の主担当者からの呼びかけにより合計33名の回答が得られた。質問項目と集計結果は以下の通りである。(表2参照)

表2. アンケート質問項目と回答集計 (n = 33) ※ 問7は複数回答、問8は自由記述

問1	職場として該当する施設
	1、特別養護老人ホーム (19名)      2、介護老人保健施設 (13名) 3、障害者支援施設 (0名)      4、特養併設通所介護事業所 (1名)
問2	主な仕事 (職種、職位) (複数選択可)
	1、経営者 (0名)      2、施設長、事務所管理者 (1名)      3、主任、介護部門の長 (6名) 4、ケアマネージャー (1名)      5、ユニットリーダー、サブリーダー、フロアリーダー (17名) 6、相談員 (2名)      7、その他 (介護士) (1名)      8、その他 (無記入) (3名) 9、その他 (一般職) (3名)      10、その他 (パート) (1名)
問3	実習指導者としての立場
	1、登録指導者 (1名)      2、現場指導者 (実習指導者講習修了済み) (4名) 3、現場指導者 (実習指導者講習未修了) (28名) ※登録指導者とは、厚生労働省に届出済の介護福祉士実習指導者講習会修了者
問4	厚生労働省が示す「求められる介護福祉像」が、2018年度のカリキュラム改正で見直されたことは知っていたか。
	1、知っていた (4名)      2、このアンケートで知った (29名)
問5	介護福祉士養成課程のカリキュラム改正により、介護実習指導の内容やポイントが変更されたことは知っていたか。
	1、知っていた (5名)      2、このアンケートで知った (28名)
問6	新カリキュラムの「介護実習」に示された3つの「教育に含むべき事項」の内容を知っていたか。
	1、知っていた (6名)      2、このアンケートで知った (26名)
問7	普段の業務でどんなことに重点をおいているか。上位3つを選択し理由を回答欄に記入 ※ 理由については表3参照
	1、利用者とのコミュニケーション (30名)      2、記録の正確さ (6名) 3、時間的効率 (6名)      4、職業倫理 (2名)      5、報告、連絡、相談 (27名) 6、施設の役割、理念の理解 (2名)      7、クレーム予防 (0名) 8、多職種との連携、チームケア (18名)      9、専門的技術、知識の研鑽 (6名) 10、利用者の生活状況 (1名)
問8	介護福祉士養成校の学生に、介護福祉士としてどのようなことを学んでほしいか。 自由記述 ※ 表4参照
	1、在学中に学んでほしいこと      2、実習期間中に学んでほしいこと 3、就労までに身につけてほしいこと

## 介護現場のニーズにおける実習指導の検討と課題

回答者の内訳は特別養護老人ホーム 19 名、介護老人保健施設 13 名、特養併設通所介護事業所 1 名、主な仕事（職種、職位）はサブリーダー、フロアリーダーが 17 名と最も多く、次いで主任、介護部門の長が 6 名（兼務含む）であった。実習指導者としての立場は実習指導者講習未修了の現場指導者が 28 名、実習指導者講習修了済みの現場指導者が 4 名、登録指導者が 1 名であった。本学では毎年 10 月に実習反省会を開催し、施設実習指導者と養成校教員が情報交換を行っている。令和 2 年度において施設実習指導者に「公益社団法人日本介護福祉士会 新カリキュラム対応 介護実習指導の内容とポイント」を資料配布し、周知を行った。今回のアンケート調査に協力を依頼した 2 施設の登録指導者も参加、周知済みであったが、問 4 の「厚生労働省が示す「求められる介護福祉像」が、2018 年度のカリキュラム改正で見直されたことを知っていたか」という設問についての回答は「知っていた」が 4 名、「このアンケートで知った」は 29 名（87%）であった。更に問 5「介護福祉士養成課程のカリキュラム改正により、介護実習指導の内容やポイントが変更されたことは知っていたか」については「知っていた」が 5 名「このアンケートで知った」は 28 名（84%）、問 6「新カリキュラムの「介護実習」に示された 3 つの「教育に含むべき事項」の内容を知っていたか」では「知っていた」6 名「このアンケートで知った」は 26 名（78%）であった。

また問 7、問 8 では介護現場の指導者たちが介護現場で働く介護福祉士に何を求めているかを確認、検証するため、普段の業務で重点をおいていること、養成校の学生（実習生）にどのようなことを期待しているかについて調査を行った。回答内容（抜粋）は以下の通りである。（表 3. 表 4 参照）

表 3. アンケート問 7. 普段の業務で重点をおく理由（抜粋）

1、利用者とのコミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・業務中だけではなく、チームとして同じ方向に向いていくためにもコミュニケーション術はとても大事だと思う。</li> <li>・サービスを実施するうえで利用者の状態（本人が過ごしていた環境、生活歴、病歴）を把握することや信頼関係を築くためにも必要である。</li> <li>・コミュニケーションの中から利用者さんへの思いや利用者さんからの表情をみることができ、センスを見えています。</li> <li>・コミュニケーションを通じ、距離を縮めることができ、その方の本質や本心を理解できるようにしたいため。</li> </ul>
2、記録の正確さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人の利用者に対して携わるのは自分だけではない為、だれが見ても本人の状態がわかり対応が取れる様にするため。</li> <li>・実習内容がどこまで理解でき、アドバイスに対してどう取り組むのかを記録で見ている。</li> </ul>
5、報告、連絡、相談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人で仕事をしているわけではないのでハウレンソウは不可欠。日々の変化に対応するため。</li> <li>・他職種との連携、チームケアを行うため必要とされる。</li> <li>・振り返りのため、積極的に知ろうとする思い。</li> <li>・日々変動的なため、把握できていないと業務上困難だから。</li> </ul>
6、施設の役割、理念の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちが向かう方向や道しるべを理解することは大切だと思う。</li> </ul>
8、多職種との連携、チームケア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チームが1つにならないと質の良い介護はできないと思う。</li> <li>・介護、医療、調理、相談員との連携なくしてサービスは提供できない。</li> <li>・1人では困難なことが多く、多職種やチームによる連携で解決に導くことができるから。</li> </ul>

表 4. アンケート問 8. 介護福祉士としてどのようなことを学んでほしいか (抜粋)

<p>在学中に学んでほしいこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マニュアル通りに業務をこなすのではなく、その人たちがその人らしく生きていける様援助することを一番に考え、今まで生きてこられた人生と一緒に振り返ってあげられる様な人間になってもらいたい。倫理・道徳など、当たり前だと思うことが考え方の違いなのか理解できていないことがある。倫理・道徳コミュニケーションを学んでほしい(技術はあとで身につけてくるのではと思う)</li> <li>・自分が介護するのは誰なのか。なぜ介護が必要なのか。高齢者が対象なのであれば高齢者を取り巻く社会の現状を理解し、福祉の意義とは何なのか学んでほしい。</li> <li>・介護福祉士は介護職の中でも仕事の内容が多岐多様なので、基礎知識や技術、観察力、判断力、忍耐力等の様々なことが必要とされることを知ってほしい。病気(認知症)のことや対応法を学んでもらいたい。</li> <li>・高齢者がますます増えていく中で一人でも多くの介護福祉士さんが育ってほしいと思います。かかわりの中で利用者さんの思い、生活の中での大変さやよろこび。</li> <li>・介護福祉士としての知識、技術など少しでも専門性を身につけてほしい。(理由:ある程度の説明などで理解してほしいから)</li> </ul>
<p>実習期間中に学んでほしいこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者さんはそれぞれ違い、様々な病気や家族関係、環境があるということ。「利用者さんの関わり方」「理想と現実のギャップ」「介護現場の実情」「介護技術、認知症の方との関わり方」</li> <li>・高齢者とのコミュニケーション力。ジェネレーションギャップを体感し、ポキャブラリーを増やしてほしい。</li> <li>・排泄、入浴、食事、移乗といった身体的介護の実践方法。</li> <li>・実際に利用者と接することで病気や障害があっても同じ人であり、人生の先輩でそれぞれの方が自分と戦ってきたことを知ってもらいたい。また、認知症の症状から起こりうる言動を見て、聞いて、触れて自分に足りないものは何かを気づいてもらいたい。一人にとらわれず、全体を目で見て観察、危険を察知することを知ってもらいたい。</li> <li>・実習生の強みもあると思うので、色々な体験をしてほしい。</li> <li>・対人援助を現実に行うことの難しさや、どのように対応、工夫しているか。現場にいないと体験できないようなことを学んでほしい。</li> </ul>
<p>就労までに学んでほしいこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶、コミュニケーション能力、笑顔、倫理、道徳。</li> <li>・高齢者の共感できる柔軟な心と物事に創意工夫で取り組める意欲。</li> <li>・人相手の仕事なので専門知識以外にも体力的、精神的負担も大きいので自分の気持ちを切り替える力を持つてほしい。</li> <li>・利用者の立場に立って話を聞く。本人だけではなく、家族の思いにもこたえられるコミュニケーション能力と思いやりをもってほしい。</li> <li>・社会人としてのマナー(あいさつや身だしなみ、言葉づかい)</li> <li>・一般人としての礼節、教養、最低限のコミュニケーション能力。</li> </ul>

問7の「普段の業務でどんなことに重点をおいているか」についての回答では「利用者とのコミュニケーション」が30名と最も多く、次いで「報告、連絡、相談」が27名、「多職種との連携、チームケア」は18名であった。「記録の正確さ」「専門的技術、知識の研鑽」「時間的効率」は共に6名、「施設の役割、理念の理解」「職業倫理」については各2名という結果であった。回答の中には普段の介護職員としての業務と、実習生を指導する指導者としての視点が混在している内容も見られたが、概ね「利用者とのコミュニケーションを通して心身の状況を理解し、チームでケアにあたる」という姿勢を重視していることが見てとれた。問8の自由記述では、養成校の学生には在学中に倫理や道徳、基礎知識や技術、観察力、認知症等障害、疾病の内容と対応についての学習を求める回答や、実習期

間中に現場で実際に利用者と接することでコミュニケーション力を身につけてほしいという回答が多かった。実習生の積極性や職員との意思疎通が指導課題であることは、鷲尾他(2020など)が行っている介護実習ルーブリック評価を用いた研究においても述べられており、介護施設現場でコミュニケーション能力が重視され、強く求められているという様子がわかる。また、問7-2「記録の正確さ」において「利用者に対して携わるのは自分だけではない為、だれが見ても本人の状態がわかり対応が取れる様にする」「実習内容がどこまで理解でき、アドバイスに対してどう取り組むのかを記録で見ている」という回答もあり、介護現場の職員が求めているチームケアを行うために必要な報告、連絡、相談に関連した記録を重視している指導者もいるということがわかった。

#### 4. 考察・まとめ

今回の調査で、厚生労働省が示す「求められる介護福祉士像」の改正や新カリキュラムの「介護実習」に示された3つの「教育に含むべき事項」について把握している現場指導者の人数が、回答者の約20%であることがわかった。外部研修や教員との打ち合わせ等で養成校と直接関わりのある登録指導者や、実習指導者講習を修了済みの現場指導者には改正、変更箇所が伝わっているが、講習未修了で養成校との関わりが少ない現場指導者への周知、確認が十分ではないことが窺える。普段の業務で「報告、連絡、相談」や「多職種との連携、チームケア」を重視しているという回答が上位を占めていたが、その対象は「利用者へのケア」であり、「実習生への指導」についてはあまり意識されていなかった、もしくは業務時間内での対応が難しかったのではないかとと思われる。また「利用者への関わりやチームケア」を重視している回答は多いが、それに伴う観察、推測した事のかたちに残すための記録、伝わりやすい質問を行うための文章力を現場で確認、研鑽を目的とした学習の互換性、連携の必要性が意識されているかという点については疑問が残った。アンケート調査の回答により、実習生はマニュアル通りに業務をこなすのではなく、利用者を取り巻く状況を理解し、なぜ介護が必要なのかを考え、指導者の説明を理解できる知識等を身につけてほしいという高度なニーズが介護現場にあることを再認識できた。これは今回調査を行った2施設が本学介護施設実習の最終段階を担当しており、学生への期待も込められた回答であると考えられる。本学教育においては介護現場での実習を通して実践へつながる知見や体験の更なる提供・充実を目指しており、実習生のコミュニケーション能力や倫理観、観察力や共感力を育成するための指導が求められている。服部他(2019)の「本学介護福祉士養成課程における実習指導の検討」で「今後、学生の実習効果を高めるために提出書類の内容を精査し、必要な項目を増減させることも検討課題である」「カンファレンスをより効果的に行うための検討も必要である」「(カンファレンスでは)学生が気づきや学びをしっかり報告し振り返りができるように導き、指導者の的確な助言が受けられるように教員が進行の手本を示す」という課題や展望を述べたが、利用者とのコミュニケー

ションへの取り組みがわかるプロセスレコードや日々の実習日誌、利用者への介護過程の書類がそれぞれ関連していることへの共通理解や実習指導者との指導の方向性の統一等について、登録指導者だけでなく実際に実習生と接する機会のある現場指導者への周知や情報収集手段等についてのサポートなど、養成校の役割と連携の必要性を再確認することができた。ただ書類を減らすのではなく「なぜその書類を学習に使用しているか」という目的や個々の実習生の学習到達度、習得レベル等について相互確認し、精査していく必要がある。その第一歩として今回のアンケート調査を行い、現場指導者にも実習指導においての変更内容を周知し、方向性を共有するという目的は達成できたのではないと思われる。実習指導者が実習生に対して、介護福祉士としてどのようなことを学んでほしいかという思いを知ることができたが、問7において普段の業務と実習生への指導の視点が混在している回答もあった。実習生への指導の視点という項目を別に作成していれば、それぞれのより具体的な結果が判明したのではないかと考えられる。今回は試験的に特別養護老人ホーム、介護老人保健施設各1か所のみで調査を行ったが、質問項目、内容を再検討し、協力施設数を増やして更なる視点の共有、課題の考察を行う事で、学生への指導内容と根拠を共有し、登録指導者や学生の不安や負担の軽減につなげることが出来ると考えられる。登録指導者のみが現場指導者に養成校との連携事項や情報伝達を行うのではなく、介護実習施設全体と養成校が相互に連携、サポートの機会を作れるよう取り組んでいきたい。

## 5. おわりに

今回の研究では介護施設の実習指導者が、介護福祉士養成教育に対して「コミュニケーションを通して利用者を取り巻く状況を理解し、なぜその介護が必要なのかを考え、現場のスタッフ達と連携、対応できる人材を育成してほしい」という期待を寄せていることが明らかとなった。現場の期待に応える実習指導のあり方について今後検討していくため、また現場の介護職員が望む介護福祉士像に近づけるため、今後の課題を以下のように考える。

- (1) より多くの現場指導者の声を集めると同時に、目的に沿った学びにつなげるためにはどのような実習記録物が必要か、カンファレンスの持ち方、現場で何に重点を置いて実習生を指導していただく必要があるのか等、実習指導担当教員間で精査する。
- (2) 実習生の「努力の方向性」と「到達度の実感（自己評価）」、実習指導者が求めている「努力の方向性」「評価としての実習生の到達度」が乖離しないよう、現在本学で行われているルーブリック評価、研究を視野に入れ、現場指導者を含めた実習指導者と「意識の共有とすり合わせ」を行う機会を作る。

また、今回確認することが出来なかったが、留学生の日本語習得レベルや生活文化の違い等から生じる課題、実習指導者が感じている指導への悩み等についても検証する必要がある。今後も実習施設と連携、情報共有の機会を作り、登録指導者だけでなく現場指導者への共有の工夫、サポートについても話し合い、介護福祉士をめざす学生が安心して実習

を行える環境を整えていきたい。

## 謝辞

本研究で使用したアンケート調査に際し、関係者の皆様に多大なるご協力をいただきましたことを、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

1. 服部優子ほか「本学介護福祉士養成課程における実習指導の検討－本学保育士養成課程の実習指導と比較して－」高田短期大学介護・福祉研究第5号、2019
2. 公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 新カリキュラム対応 介護実習指導の内容とポイント pamphlet.pdf (jaccw.or.jp)
3. 厚生労働省ホームページ 「介護福祉士養成課程における教育内容の見直し」について 第13回社会保障審議会福祉部会 福祉人材確保専門委員会 平成30年2月15日 Microsoft PowerPoint - 介護福祉士養成課程における教育内容等の見直し (mhlw.go.jp)
4. 鷺尾敦ほか「介護実習ループリック評価結果を用いた学生の実習分析」高田短期大学紀要第38号、2020